
終末幻想

まつを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末幻想

【Nコード】

N6249P

【作者名】

まつを

【あらすじ】

突然、体が動かなくなり、自由になるために別の世界に行った西坂トシ。

そこで、何が起こるのか？そして、その世界とは？

第一章 始まり

誰にだって、普通に生きて、夢を追いかけていくことくらいできるものだと思っていた。普通に生活して友達とわいわい騒いですごせると思っていた。

でも、俺はあの日から全て変わってしまった・・・。

あの日には、いつも通り学校に行って、つまらない授業をうけて、友達と帰っていた。

「なあ、トシどこか行かね？お前、いつも部活だからさ。たまには、パーというようよ。」

「そうだな。久しぶりにどこかいくか。とりあえず、まずはゲーセンにでも。」

「あっ、俺も俺も。行きたい！！」

「よし、いくか。」

俺は、久しぶりに友達と一緒に遊びに行くことになった。最近は、試合が近かったから部活で忙しかったし、たまには息抜きしたかった。

「早く行こうぜ、トシ。」

「おう。」

俺たちは、自転車にのって、とりあえず駅前に向かうのだった。あそこら辺には、いろんなものがある。遊びに行くには、十分だった。「なあ、マサ。最近どうなのさ？日高さんときあってるんだろ。」

「何で知ってんだよ。」

「結構、うわさ広まっちゃってるぜ。いいよな、日高さんかわいし。」

「そうそう、いいよな。うらやましいぞ、このヤロー。」
なにげない会話、すべていつも通りだった。交差点で赤信号にかかった。

「マサ、どうなのよ？いつからだよ？」

「えー、教えなきゃダメだよ。」

「いいじゃん、友達だろ。みんなには秘密にするからさ。」

「えー、まあいいけどさ。えーと、たしか・・・。」

その時だった。

「あぶない！！」

誰かが叫んだ。

甲高い音が響いた。

俺は、なぜか宙に浮かんでいた。

あれっ？なんでだ。さっき、あいつらとしゃべっていたのに・・・。

ああ、空がきれいだ・・・。

「トシ、大丈夫か？おい、おい・・・」

マサたちの声が聞こえたような気がした。でも、目の前に見えていた世界はだんだんと遠く暗くなっていった。

目が覚めたら、一番最初に見えたのは、白い天井だった。何がおきたのか、まったく分からなかった。おぼえているのは、一瞬浮いたときに見えた空がとても青く、キレイだったくらい。

「ん・・・。今、何時だ？」

時計を探そうとした。無性に今の時間が知りたかった。

その時、体が異様に重いことに気がついた。首から上はちゃんと動く。

でも、それ以外は……。

「何だ。これは……。」

体のほとんどの部分が動かない。これじゃ、何もできない。あいつらと一緒に遊びに行くことも、何もかも。

これから、俺は……。

「なんで、なんで、なんで……」

俺は、いつのまにか「なんで」と連呼していた。ドアが開く音がした。

「西坂くん、目が覚めましたか？」

俺は、声がする方を向いた。そこにいたのは、若干白髪のはえた少し苦労していそうな人だった。

「ん？ここは、病院ですか？俺に、何があったんですか？」

「私は君の担当医の南条です。君はおとといの交通事故でこの病院に運ばれてきました。残念ながら、君の体は……。」

「知ってますよ。動かない、ですよね？」

「ですが、必ず動かせることができるよう最善を尽くします。安心してください。では、まず……」

医者の話は途中から聞きたくなかった。どうせ嘘ばかりついていると思った。自分の体は自分が一番よく分かる。

絶対に治らない。そう思った。

「それでは、明日から体を動かすりハビリに入ります。今日は、ゆっくり休んでください。では。」

俺は、何もできない体になってしまった。友達とどこかいくことも、学校にいくことも。

治る可能性が1%でもあるなら、どんな方法でも試したいと思った。変な儀式でも、黒魔術でも、そんなオカルトじみたことさえ手に出そうとも考えた。

そんなことを、考えているうちに俺の意識は遠くなっていった。

気がついたら、真っ黒い世界にいた。

「ここはどこだ？俺は、交通事故にあって病院にいたはずじゃ……。」

なぜか手が、腕が動く、医者にまで動かないといわれていたのに。

「体が治っている。そんなわけ……。」

とりあえず、このままいては何もかわらない。前に進めば何かあるだろうと思った時だった。

「動かないで、今の君の体はまだ不完全。歩いただけで、何が起るかわからないわ。」

いつのまに、目の前に女の人がいた。俺よりも、少し年上に見える人だった。

「あなたは、誰ですか？それにここは？」

「私の名前なんて、どうだっていいでしょう。どうせこの世界のこの場所ではか会うことができないのしょうから。それに私はこの世界に導くことしかできないしね。」

「じゃあ、この世界はなんなのですか？」

「ここは、現実とはまるで違う場所。一回こちら側に来てしまったら、帰ることができなくなってしまうかもしれないわ。でも、その代わり自由になることは間違いないわ。ただ、最近出沒するものを何とかしてもらおうと思うけど。」

「その出沒するものって？」

「わからないわ。だって、私はここから離れることができないもの。」

俺は、現実に戻っても、何もすることができない体だし、自由になれるならどうなってもいいと考えていた。それに、目の前にいる人

の顔はとても悲しそうに見えて、とても気になっていた。

「あなたは、どうする？現実にはいる？それとも、あっちの世界に行ってみる？でも、後でいやだと言わないでね。一度決めたらかえられないわ。」

「どうせ、現実に戻っても、何もできない体だし。その世界も、気になるから行ってみたい。」

「ほんとにいいの？後悔しない？」

「ああ、行くよ。」

「そう。じゃあ、目をつむっていてね。」

だんだんと体があたたかくなってきた。そして、このあたたかさが何もかも解決してくれるような気がした。

「先生、西坂くんの容態が急変しました。すぐ来てください！」

「なんだって！昼間はあんなに安定していたのに。何があったんだ！！」

「わかりません。はやくっ！！」

なんだかあの時の医者の方が聞こえたような気がした。でも、そんなことはどうでもいい。はやく、あの人が言っていた世界を見てみたい。いったいどんなのだろうか。だんだんとあたたかさが全身につたわり、とてもいい気分になっていった。そして、意識はだんだんと遠くなっていった。

「ようこそ、戸別へ。そして、いつてらっしゃい。」

第二章 二人との出会い

「・・・おい、おい。大丈夫か？」

誰かが呼んでいる。目をあげると、そこには、俺の顔を覗き込む二人の顔があった。

「ああ、ここはどこだ？」

「んー、知らないの。戸別だよ。もしかして、記憶喪失ちゃん？」

「いや、記憶はあるけど、いつのまにかここにいた。なんだか女の人に呼ばれた気がしたんだが。」

「ここには、俺らしいないぞ。」

俺と同じ歳に見える体格のいい男がいた。

「そうだよ。」

俺より年下に見える少女が言った。

「ほんとに大丈夫か？」

「ああ。でも、この世界のことは何も知らないんだ。ほんとに、女の人に呼ばれた気がして。」

俺は、自分がどうにかしてしまったと思ってしまった。あの女の人
はなんだったんだろう。確かに記憶はあるし、あの人が言っていた
ように、体は自由に動くし、なんでもできそうだ。

「ねえ、ケンちゃん。この人どうする。このまま、ここで見過ご
すわけにはいけないし。それにあぶないよ。」

「そうだな。ここで見過ごすのはよくないな。外族どもに殺されて
は、俺たちが悪者みたいだしな。」

「そうだよ。ねえ、あなたの名前なんていうの？私、神瀬リン。」
「俺か？西坂トシだけど。」

「トシくんかあ。ここは、危ないから、私たちと一緒に市街地に行
こうよ。」

「いいのか？」

「ああ、いいさ。ここは、外族が現れるからな。リンの言うとおり

ひとまず市街地に行こう。」

「ありがとう。一緒に行くよ。君の名前は？」

「織節ケンだ。よろしくな。」

「ああ、よろしく。」

「私も忘れないでよく。普通にリンって呼んでいいからね！」

俺のこの二人との出会いは、こんな感じだった。すぐになじめそうな人たちでほんとによかった。でも、1つ気になった。

なぜなら、リンが日高さんにそっくりなんだ。

「あのさ、リン。日高って呼ばれたことあるか？」

「えっ、何？日高？」

「そう。」

「ないよく。誰、それ？トシくんの彼女？」

「違うよ。何でもない。」

「何それ。トシくんちよつと顔赤いよく。」

顔赤くなっちゃってたか。なんせ、あっちの世界じゃ日高さん好きだったしな。こんなに普通に話しかけてくれるなんて、そりゃ、うれしいさ。

「おいっ、早く行くぞ！」

「は。いい。トシくん、いこつ。」

「ああ。」

俺は二人についていった。なんだか安心していられるような気がする。この二人といられるとうれしかった。そして、市街地って2人が言っていた所に向かっていった。

俺がさっきまでいた所は、森だったらしい。確かに木はいっぱい生

えていたが。

だんだんと明るさが増していき、大きな門が見えてきた。

「ここが、市街地の入り口だ。ちよっとまってる。門番と話してくる。お前はここの住民ではなさそうだしな。」

「ああ、ありがとう。」

ケンが先に門に向かっていった。

「すごく大きな門と壁だな。何かあるのか？」

ケンが先に行ってしまったので、リンに話しかけてみた。

「ほんとに、トシくん何も知らないね。外族が来るから、それから守ってるんだよ。」

「ん？ さっきも言ってたんだけど、外族ってなんだ？」

「トシくん、外族も知らないの？」

「ああ、わるい。」

「もう、トシくんったら……。いいよ。教えてあげるよ。」

外族ってね、最近になって現れたよくわからない生物？ みたいなものだよ。形も様々だしね。ロボットみたいなものもいれば、獣みたいなものもいるの。」

ああ、あの女の人がなんとかしてほしって言ってた出沒する物ってやつか。

「その外族って、どうしてるの？」

「もちろん、退治してるよ。危ないじゃん。」

「誰が？」

「はい、私。」

「えっ？ リンが？」

「うんっ。私っていうかケンちゃんもだけど、討伐師の資格を持ってる人だよ。」

「へえー、そうなのか。リンって戦ってるイメージもてないんだけど。」

「えー、そうかなあ……。まあ、大抵バックアップだからね。」
ケンがこっちにきた。なにやらさっきまで持ってなかった袋を持っ

て。

「おいっ、トシ。お前、戸別にいたっていうデータがあったぞ。それに、討伐師の資格までもっていやがる。後、門番がこれわたせつてさ。」

「え？俺が、討伐師？それに、これって・・・。」

ケンにわたせた袋の中には、2つの箱が入っていた。

「中みてもいいのか？」

「俺に聞くなよ。門番がわたせていうし。お前のだろ。」

「トシくんのかぁ。何が入ってるんだろうね。」

「じゃあ、あけてみるよ。」

箱を開けると、バンドと2丁の拳銃が入っていた。

「へえ、ガンナーか。お前どうしたんだ？それにこんな銃見たことないぞ。お前用にカスタムされているんじゃないか？」

「いや、身におぼえがないんだが・・・。このバンドは何？」

「それ、討伐師の証拠みたいなものだよ。私のは、バンドタイプじゃなくてネックレスだけだね。」

そういつて、リンは首からネックレスを外して見せてくれた。

「ほらっ、同じ紋章が入ってるでしょ。」

確かに、バンドとネックレスには扉の前に2本の剣が交わってる紋章が書いてあった。

「この紋章がないと武器を持つことは禁止されているんだ。ちなみに俺の武器はこれだ。」

一瞬、ケンの腕が光ったと思うとケンは槍を持っていた。

「どこからだしたんだ？」

「あれ？、トシ。そんなことも知らないのか？」

「ケンちゃん。トシくん、ほんとに何も知らないみたいだよ。さつき外族についてはなしてあげたもん。」

「トシ、本当か？」

「ああ、悪いが本当に知らない。」

「そうなのか・・・。まあ、いい。俺たち討伐師は必ず紋章の入っ

た何かを持っている。それに、武器が粒子化してはいつてるから、念じてみれば出てくるようになってるんだ。大抵の武器は自分が使いやすいものを買って、お前のものというバンドに契約するんだ。だから、最初から武器があるなんてありえない。やっぱり、お前は何かあって、記憶を失ってるんじゃないのか？」

「いや、本当に記憶はあるんだが……。もしかしたら、何か忘れているのかもしれないな。」

「だろうな。じゃないと、絶対にデータなんて残らないしな。その銃使ってるうちになにか思い出すかもしれないな。後でとりあえず訓練してみるか？」

「ああ、訓練なんてできるのか？」

「できるよ。討伐師の特権みたいなものだよ。後で、いこうねっ！」

「そうだな。」

「とりあえず、バンドつけてみる。銃の契約もしないといけないしな。」

「ああ、つけてみるよ。」

俺はケンにいわれたとおりバンドをつけてみた。それは、元から俺のために作ってあったかのように、いや、前に俺がつけていたかのようにぴったりのものだった。

そして、つけてみると、銃の入っていた箱が光りだした。

「ん？なんだ？」

「お前には、驚くことばかりしてくれるな。その銃、契約済みだぞ。箱から消えてるし。」

「ほんとだあ。トシくん、ほんとに戸別にいたみたいだね。」

「もしかしたら、そうかもな。」

俺は、適当に答えていた。もちろん、戸別にいたことなんていない。こんな銃持ったこともない。もしかして、あの女の人が用意したのか？

そう思ったときだった。

「イタッ。」

バンドをつけた腕に一瞬激痛が走った。

「どうした？」

ケンが心配そうに見てくる。

「いや、大丈夫だ。もう痛みはひいた。なんだ、これは！」

「どうしたの。・・・えっ！」

「なんだ、そりゃ。」

みんな驚いてしまった。なにせ、俺のさっきまでつけていたバンドは消えてしまい、腕に焼かれたように紋章が刻まれていたからだ。

「なんなんだ、それ。普通ありえないぞ。とりあえず、いろいろなことが分からないことばかりだから、中に入って調べてみよう。」

「ああ、そうだな。調べられるのか？」

「もちろんだよ。大きな図書館があるしね。」

「そうなのか？じゃあ、そこにつれていってもらえるか？」

「いいよ。とりあえず、中にはいろ。」

リンのその声とともに、俺たち3人は市街地の中に入っていくのだった。

中は意外にも立派な建物ばかりだった。でも、ところどころに壊れているものもあった。

「トシくん、どお？市街地は？何か思い出しそう？」

「いや、なにも・・・。」

「そっかあ・・・。」

リンが悲しそうな顔になってしまった。

「ごめんな、リン。」

「ううん、いいよ。そのうち、思い出すかもしれないね。すぐに思い出せたら苦労しないもんね。」

「悪いが、今日は行くのはよそう。もう日が暮れてきた。明日にしよう。」

ケンが言うとおりの日がかなり傾いていて、夕日がきれいだった。それと同時に人がみな急いで自分たちの家に帰るようだった。

「ああ、分かった。そういえば、何でみんな急いでるんだ？」

「夜は、外族がでるからだよ。いくら壁があっても、怖いものは怖いからね。みんな家に閉じこもっちゃうんだよ。」

「どんだけ、外族って怖いんだよ。俺はそう思って少し恐怖におちいった。」

「トシくん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。」

「トシ、お前リンの話を聞いて外族が少し怖くなったんだろ。」

「そんなことないっ！」

「そう怒るなって、顔見りや分かっちゃうんだよ。まあ、記憶ないから、どんな奴か分からないもんな。」

意外にケンって勘強いかもしれない。

「さあ、俺たちの家に行こう。他の仲間にも教えないといけないしな。」

「仲間？」

「くれば、分かるよ。さあ、いこっ！」

そう言って、リンは俺の手をとるのだった。

「リンっ!？」

「なにに？、トシくん。顔真っ赤だよ。」

「なんでもない！」

「そっかあ。はやくいこっ!!」

そういつて、リンは俺の手をひき、俺たちは一緒に走るのだった。

「ケンちゃんもはやく。」

「おう、今行く。」

そういつて、ケンも走ってくるのだった。

第三章　　またまた、出会い

——「どうした？ぼうつとして。」

「ん？なんでもなくい。ごめんね、マサ。」

「そう。なら。いいけど。」

最近、日高さんはぼうつとしてる時間が多い気がする。何かあったのだろうか。

「そういえばあ、西坂くんだけ？」

交通事故にあって、意識不明のマサの友達って。」

「そうだけど・・・。トシがどうした？」

「んー、かわいそうだなあって。」

「そうだな。何もできないしな。」

「そうだよねー。そろそろ帰ろっ！」

「帰るか。」

そういつて、日高さんと帰るのだった。

でも、どうしたんだろ。いきなりトシの話なんかして・・・。

少し気になった。——

リンにつれられてきた所は、大きな屋敷だった。

「ついたよ。」

「ずいぶん、大きな家だな。お前ら、金持ち？」

「そんなわけないだろ。仲間の一人の家にみんなで住んでるんだ。」

「誰だよ。その人？」

「後で、紹介するよ。」

「そうか。わかった。」

そう言いつつも、どんな人がいるのか心配だった。金持ちっていうと、傲慢で、生意気な気がしたから……。
でも、俺の心配は一気に打ち砕けることになった。

「ただいま。マイちゃんいる？」

「はい。なに？リンお姉ちゃん。」

「この家にもう一人住ませてほしいんだけど。いいかな？」

「もちろん、いいよ。誰？男の子？女の子？」

「トシくん。こっちきて。」

リンに呼ばれて、俺は家の中に入った。

そこには、なんとフリフリのドレスをきた女の子がいた。

「ワーイ、お兄ちゃんだ。」

と言って、女の子は抱きついてきた。

「この子、風宮マイちゃん。この家の主だよ。ちゃんとあいさつしてね。」

リンにそう言われて、びっくりした。お金持ちってこの子のことだったんだ……。想像が完全に壊された。

「ん？お兄ちゃん、どうしたの？」

「なんでもないよ。俺は西坂トシだよ。よろしくね。」

「うん。トシお兄ちゃんか。また家族がふえた。ワーイ！！」
そう言って、マイちゃんは俺の胸に頬ずりしてきた。

「マイちゃん、トシくんの部屋とか、勝手に決めちゃっていいかな？」

「いいよ。あいてる部屋つかって。いっぱいありすぎて困ちゃってるから。」

「マイちゃん、ありがとね。」

「いいよ。トシお兄ちゃん。」

「じゃあ、トシくん。まずは、みんなに紹介したいから、リビング

にいこっ！

ちゃんといてきてね。」

「分かってるよ。迷子になりそうだしな。」

「迷子ね。私も最初に来たときはなっちゃったよ。」

「リンらしいな。」

「らしいって、なによ。もう。ケンちゃん、みんな呼んできて。」

「はいはい。トシ、ちゃんとリンについていくんだぞ。なんたって、この家広すぎなんだから。」

「わかってるよ……。」

「じゃあ、いこっ！トシくん。」

「ああ。」

「あと、マイちゃん。いつまで、トシくんを抱っこされてるの？」

「え。いいじゃん。トシお兄ちゃんいいよね？」

「別にいいけど。」

「やった。」

「トシくん、いいの？」

「かまわないよ。別に。」

「そっかぁ……。」

リンが、若干暗くなった気がした。

「リンお姉ちゃん。もしかして、やきもち？」

「そんなわけないよ。はやくいこっ！」

そう言いつつも、リンは顔が真っ赤だった。もしかして、俺に気があるのかな……。

「トシお兄ちゃん、早く行かないとリンお姉ちゃん見えなくなっちゃうよ。」

マイちゃんにそう言われ、俺は急いでリンの後を追うのだった。

リビングは、とてつもなく広かった。もしかして、俺の前の部屋の十倍以上あるんじゃないか……。

そう思ってたなら、ケンがやってきた。

「みんなもうすぐくるってさ。」

「そっかあ。みんなきたら、トシくんのこと紹介しないとね。」

「何人いるんだ？」

「五人だよ。みんな討伐師だから、トシくんいろんなこと聞いてみてね。」

「そうか……。」

そんな話をしていると、マイちゃんが話しかけてきた。

「トシお兄ちゃん、マイ、そろそろ眠くなってきたかも……。」

「えっ！？ 部屋いく？」

「ううん、トシお兄ちゃんと一緒にいい。このまま寝ていい？」

「いいけど……。座ってもいいかな？」

「うん……。あそこのソファアに座って。」

そう言って、眠そうなマイちゃんは、部屋の窓際にあるソファアを指さした。

「うん、ありがとう。リン、ちよつとあっちに行ってるね。」

「うん、わかった。みんなきたら呼ぶね。」

「ああ、ありがとう。」

マイちゃんに言われたソファアに座ると、窓から見える星空はきれいだった。

「マイちゃん、キレイだね。あれ？」

マイちゃんを見ると、すやすやと気持ちよさそうに寝ていた。俺は起こさないように、マイちゃんをソファアに寝かした。そして、寝ているマイちゃんの横に座って、また星空を眺めていた。

「・・・シくん、おきて。みんなきたよ。」

いつのまにか、寝てしまったようだ。隣では、マイちゃんが寝ていた。

俺は、マイちゃんを起こさないように、ゆっくりと立ち上がった。

「ごめん、リン。寝てたみたいだ。」

「もう。気持ちよさそうに寝てたから、起こしにくかったよ。」

みんなそろったから、あっちいこっ！」

そう言われ、リンに手を引かれ、急いで向かうのだった。

「よお、新入り。眠くなるほど何してたんだー？もしかして、マイ姫と・・・。」

「そんなわけないじゃないですか・・・。」

マイちゃん寝かしてたら、気持ちよさそうで一緒に寝ちゃっただけです。」

「もしかして、ロリコン？」

「・・・不潔。」

「ちがいます。なんとかしてー、リン。」

「みなさん、ちがいますよ。」

「そうなのか、つまらん。」

「いや、つまんないとかそういう問題じゃないでしょ。」

いきなり初対面の人にからかわれた・・・。

「おう、悪い悪い。俺は、鳴沢ヒデキだ。お前は？」

さっき、からかってきたゴツツイ体の男が言ってきた。

「西坂トシです。よろしくお願いします。」

「西坂かぁ。明日から覚悟しろよ。一応、ここの教官みたいなものだからな。ガハハ・・・。」

この人が教官って・・・。なにされるんだろ。

「トシ、この人いい人だから、しっかりとついていけよ。ちゃんと

ためになる。」

ケンに断言された。

「ガハハ……。織節、ほめるなよ。」

「トシくん、こっちにきて。」

リンに呼ばれたほうに行くと、さつき、ロリコンとか不潔とか言ってきた人たちがいた。

「こっちがヒルダさん。」

さつきロリコンって言ってきた人だ……。

「あなたのためにきたんじゃないんだけどね……。ケンさんがきてって言うから。」

ヒルデガルド・スタットフェルトですわ。ヒルダと呼んでください。

以後、よろしく。」

「こちらこそ、よろしく。ヒルダさん。」

「あと、この子がユリちゃん。」

「……。無部ユリです。」

そう言って、俺に興味がないのか、なにやらいじってる。

黒くて、細長い筒が特徴の……。

「もしかして、スナイパーライフル？」

「……。うん、そう。」

なんかすごい人が、住んでないか？この家……。

「あれ？そういえば、さつき五人って言ってなかった？」

「あー、それなんだが、あとの二人は今依頼で遠くまでいってらしくて、今いないんだ。」

帰ってきたら、紹介してやるよ。」

「そうなのか……。あとの二人ってどんな人なんだ？」

「それは、会ってのヒミツだよ。」

「おい、西坂。織節から聞いたんだが、お前変な討伐師らしいな。記憶がないとか何とやら。」

まあ、そのうち思い出すだろうが、お前は何使ってるんだ？」

「一応、わたされたのは拳銃ですけど・・・。」

「一応って、どういうことですか？」

「トシくん、門番さんにいきなりわたされたんだよう。普通そんなことありえないのにね。」

「そうですね。」

「・・・不自然。」

「まあ、そういうことは明日考えよう。」

「そうですね。ケンさん。」

そういった流れで今日はお開きになってしまった。

俺って、本当に何なんだろう。もう一度、あの暗い世界にいてみたい。じゃないと、俺は何なのか分からないから。

まあ、そういうことは明日考えよう・・・。

「リン。マイちゃん部屋に連れて行こう。ソファーに寝かせっぱなしだ。」

「そうだね、トシくん。」

マイちゃんはさっきまでと同じように気持ちよさそうに寝ていた。

「マイちゃん、幸せそうに寝てるなあ。」

マイちゃんを抱き上げ、そう言った。

「そうだね。きっとトシくんがきてうれしかったんだよう。」

マイちゃんの部屋は、こっちだよ。ついてきて。」

マイちゃんの部屋は、かわいらしくベッドにはたくさんのぬいぐるみがあった。

そのベッドにマイちゃんを寝かせた。

なんか、ぬいぐるみにうもれそうだな・・・。まあ、大丈夫かな。

「おやすみ。」

静かにそう言って、部屋を出た。

「じゃあ、トシくんの部屋に案内するねっ！」

確か、私の部屋の隣があいてたと思うから。そこでいい？」

「いいよ。」

しばらく歩いていくと、

「ここだよ。どうぞ。」

リンがドアをあけてくれた。そこには、俺には十分すぎる大きな部屋だった。

「家具とか足りないものは、明日買いに行こうね。」

あと、何かあったら私の部屋となりだから、よんでね。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみ。今日一日ありがと。」

「いえいえ、どういたしまして。また明日。」

リンが行ってしまった。

今日は、とても疲れた。病院にいたと思うと違う世界に飛ばされたみたいだし、分からないことばかりだし。まあ、時間が解決してくれるだろう。

明日からが楽しみだ。

あの何もできなくなった世界と違って。

第四章 朝

――「すみません。西坂トシくんの病室って、どこですか?。」
「えーと、今調べます。あつ、3階ですね。あと、この面接カードを記入してください。」

「はい、わかりました。」

私は、記入されたカードを受け取った。

「ありがとうございます。西坂さんの病室は306です。
一緒に行きましょうか?」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます。」

女の子は行ってしまった。

「西坂くんって、あの意識不明の?」

「そうですよ。1回、目を覚ましたのに、いきなり。」

あの女の子誰なんでしょうかね? 見たことありませんけど。」

「彼女じゃないの? 西坂くん、そんなに悪い顔じゃないし。
名前なんですって?」

「えーと、これには・・・」

「・・・お兄ちゃん。トシお兄ちゃん、朝だよ。起きてー。
ん? 朝か・・・。」

なんか体が重いな。風邪でもひいたかな。

「お兄ちゃん。早く起きてよ。」

はいはい、起きますよ。顔を動かすと、俺の体の上に……。

「おはよう、マイちゃん。起きるから、どいてもらってもいい?」

「うんっ!!」

……マイちゃんに乗っていた。初めてだよ、こんなこと。

朝起きたら、女の子が乗ってるなんて。

「ん、眠いよ、トシくん。まだ寝ようよ。」

ん?今リンの声がしたような……。

「ねえ、トシくんってば。」

やっぱり、リンの声がする。しかも近くで。

「なんで、リンお姉ちゃんベットの中にいるの?」

「そりゃ、寝るためだよ、マイちゃん。って、ええ!!」

なんと、リンが俺の隣で寝ていたのだ。

「だって。昨日、さみしかったから。」

トシくんの部屋にいったんだけど、もう寝てたから、私も寝よう

かなって。」

おいおい……。心臓ばくばくなんですけど。

「リンお姉ちゃんだけ、ずるいつ。マイもお兄ちゃんと一緒に寝る

よ。」

「ダメ。マイちゃん、トシくんは私と一緒に寝るの。」

「マイも。いいでしょ?お兄ちゃん?」

「おいおい……。困りますよ。二人とも……。」

「なんで?」

「なんでって、そりゃ……。」

その時、ドアがひらいた。

このシチュエーションは、やばい……。

「おい、トシ。よく寝れたか。」

……。って、ごめん。俺、邪魔だったな。じゃあ、また。」

「ケーン、行かないでー。」

俺の朝は波乱の展開だった。

妹みたいなマイちゃんに起こされ、日高さんに似ているリンが隣に寝てて・・・。

なんだか夢みたいになって・・・おいおい、しっかりしろ俺。

でも、リンのパジャマ姿かわいかったな・・・。

第五章 訓練!?

――私はまた夢を見た。

どこかで、西坂くんと一緒にいる夢を。

どうしたのだろうか。彼とは、特別な思い出も何もない。

ただ、一緒の学校に通っているだけ。

こんなふうに彼のことを思ったこともない。

ただ、事故にあったのを聞いてかわいそうに思っただけ。

でも、彼のことを考えるとなんだか……。

――

「よっ、もて男。おはよう。」

「あっ、鳴沢さん、おはようございます。もて男って言わないで下さいよ。」

「ガハハ……。ケンに聞いたぞ。ありや、もて男って言うしか……。

「もー。いろいろ大変だったんですよ。朝から。」

「まあ、いいじゃないか。じゃあ、これから訓練するぞ。お前はガ
ンナーらしいから、射撃場にこい。そこでまってる。では、お先に。」

「って、まってください。場所わからないですよ。」

鳴沢さんは行ってしまった。誰に聞こうか……。

とりあえず、リビングに行こう。誰かいるかもしれない。

ユリしかいなかった。一番話しづらいんだが……。

「なあ、射撃場ってどこだ？」

「……あっち。」

外にある大きな建物を指していた。

「行きかたわからないんだが……。指されても。」

「そう、ついてきて。」

そういわれ、ユリはスタスタいつてしまった。急いで追いかけては。

「おい、おそいぞ、西坂。何分待たせるんだ。おつ、嘸部もいたのか。」

「お前も撃ってくか？」

「……いい。西坂くんが、場所わからないっていうから教えただけ、帰る。」

「ガハハ……。そうか、悪かったな。」

「ううん。大丈夫。じゃあ。」

「ありがとな。」

俺の声をきく前にユリは行ってしまった。

「悪かったな、西坂。わからないなら、きけよ。」

「きく前にあんたがどこか行ったんだろ。」

「ガハハ……。おう、そうだったのか。悪かったな。」

今、中でうるさいやつが撃ちまくってるから、外で少し説明しよう。

「うるさいやつ？」

「中に入ればわかるよ。」

まずは、契約した武器をだしてみろ。だし方はそうだな……。頭の中でイメージしてみろ。」

イメージってな……。あんまりあの時見てないんだがな。
できるのかよ……。確か……。

一瞬、手が光ったような気がした。

「おっ、うまいな。初心者を出すのに一苦労なのに。ここまではや
いとは……。」

俺もびっくりした。記憶力は全然よくないはずなのに……。

それに少ししか見てないのに、あの時の拳銃が鮮明に頭の中に出て
きたのだから。

「お前、やっぱりすごいのかもな。どれ、見せてみる。」

鳴沢さんに言われたので、片方わたしてみた。

なんかすごい持ちやすいな。まるで俺のサイズに合わせてみたいだ。
「どうなってるんだ、これは。まったく構造がわからん。」

「俺にいわれても困るんだが……。」

「だろ。誰だよ、こんなの開発したやつ。」

ちょっとまでよ……。これと同じやつ、使ってたやつがいたよ
うな……。」

「誰ですか？」

「いや、思い出せない。相当昔みたいだ。」

とりあえず、そいつは魔弾使だった。もしかしたら、お前も。」
「えっ？」

「いいから、とりあえずこれもって、弾丸をイメージしてみろ。
たぶん装填されるはずだ。」

おいおい……。弾丸なんて、イメージできるかよ。

まあ、やってみるか。

考えた瞬間、少し拳銃が重くなった気がした。

「おお、うまいな。それ、もう撃てるぞ。」

「え？」

「だから、もう撃てるって。」

いや、それに驚いているんじゃない。うまいって……。俺にそんな才能あるのか……。いやあるはずがない。

でも、頭の片隅にはいろいろなものの構造の記憶があるような気がする。

しかも、知らない武器ばかり・・・。

俺の頭は一体どうなってしまったんだ・・・。

「お前、魔弾使いでも、双銃使いでもあるのか。

ガハハ、こりゃおもしろい。まずは片方で訓練するか。

いきなり双銃は無理だろ。片方消してみろ。これまたイメージな。やってみろ。」

消すってどんなイメージだよ・・・。何も持っていないみたいなのか？すると、左手が軽くなったような気がした。

「あれ？できてる？」

「できてるぞ。ほんとうまいな。

よし、なんか出したり消したりして慣れてみる。イメージが大事だぞ。イメージが。」

「わかった。」

俺は何回かイメージして、出しては消してを繰り返した。だんだん慣れてきた気がする。

「ん？なんだこれ。」

「どうした？」

「今なんか思い出した気がするんだ。」

「なんかって、なんだ？」

「剣だったかな・・・。」

「剣？お前、双銃使いだろ？」

「たぶん・・・。」

「まあ、何か思い出したら、ためしにその剣、イメージしてみろよ。何かわかるかもしれん。」

「ああ、わかった。」

「よし、それじゃあ、出し入れするのも速くなったし、中に入っ
ためしに撃ってみるか。」

「いいのか？」

「ガハハ・・・。いいも何も撃たなきゃ何も始まらんだろうが。

中に入るぞ。ついてこい。」

中には、甲高い音が立て続けになっていた。耳が痛い・・・。

「おい、うるさいから一回やめろ。」

鳴沢がさけんでいた。でも、音は鳴り響いていた。

「うるせー。」

「なんですって、わたくしの愛銃が奏でる音色がうるさいですって
？」

「ああ、うるさい。」

そこにいたのは、ヒルダさんだった。てか、両手に持ってるの・・・。

「あら、西坂さん。訓練でもなさるの？」

「まあ、そんなところ。」

「そうですか。ここに来るってことは、何か銃器を使うってことで
すね。」

何使うんですの？」

「こいつが使うのは、特別製だ。なんと、魔弾使いだ。」

「なんですって？魔弾使いなんて、何人もいらっしやらないのに。
そんなことあり得るんですの？」

「ああ、俺もびっくりしたが、あり得る。こいつの銃に弾丸を装填
するところがないんだ。」

そしたら、魔弾をこいつが装填したんだよ。」

「そうなんですの……。わたくしも訓練見てもいいでしょうか？」
「べつにかまわんぞ。いいよな？」

「はい。」

「だそうだ。しかし、めずらしいな。お前が、他の人の訓練見るなんて。」

「いえ、魔弾というものが気になるだけなんです。」

「そうか……。そういえば、織節が中庭で訓練するって言ってたぞ。」

「そ、そうなんですの……。では、そちらを見に行きますわ。
べ、別にケンさんが気になるんじゃない。え、えーと、わたくしも
セイバー関連の武器も使ってみようかと……。」

「おいおい、ガンナーやってセイバーもやるのか？
無理だろそんなの。」

「でも、双剣双銃使いがいたって聞きましたけど。」

「それは、伝説だろ。」

「やってみなければわからないでしょう。」

「お前、銃器以外の構造がわかるのか？」

「いえ、それは……。」

「だから、無理だ。討伐師は自分に向いた武器しか覚えられんよ。」

「そうですわね。それでは、私は失礼します。」

ヒルダさんは出て行ってしまった。

さっきの話が気になった。自分に向いた武器しか覚えられないって・
。。。

じゃあ、俺はなんなんだ。さっき、何か剣のようなものを思い出した
気がする。

でも……。

「おい、どうした？何か考えごとか？」

「いえ、何でもあります。少しぼうつとしてました。」

「そうか、ならいいんだが。それじゃあ、射撃訓練始めるぞ。」

「はい。」

「では、ついてこい。少し奥に行くぞ。」

俺たちは中に入ってゆくのだった。

花火をやった時のようなにおいのする建物の奥へと……。

「よし、それじゃあ、始めるぞ。銃器なんて、引き金引けばなんともなる。」

楽なもんだろ。」

「はあ、そうですね。」

「はあ、とはなんだ。返事は、はいっ、だろ。」

まあ、いい。魔弾なんてめずらしいから、どうなるかわからん。まずは適当に撃ってみろ。

とりあえず、その台からな。」

俺は目の前にある一定の距離で仕切られた部屋に入った。部屋の前の方には台がある。

とりあえず俺はその台の後ろから、目の前に現れた的を狙ってみた。

俺は、引き金を引いた。

ひどく乾いた音がした。目の前の的は、倒れている。

どうやらあたったようだ。

「おっ、ちゃんとあてたか。見た限り反動はなさそうだな。どうだった？」

「なんか、簡単に倒せるんだなって思いました。」

「そうか、そうか。威力は……。だいたい、普通の銃弾より少し強いくらいか。」

「そうなんですか……。てか、よく一回見ただけでわかりますね。」

「ガハハ。そりゃ何人もの訓練生を見てるからな。」

まあ、そんなことはどうでもいい。今からの的を次々だすから、当ててみる。」

「はいっ。」

俺の目の前に何個もの的が出てきた。俺は出てきては撃ち、出てきたら撃ちを繰り返した。

そして、たまに弾丸をイメージして装填し、また撃った。

何回も撃ち続けていると、前にもやったことがあるような気がしてきた。

でも、そんなことありえないよな……。

「よし、そこまで。なかなかうまいな。じゃあ、もう片方出してみる。」

双銃がお前のスタイルみたいだしな。後は、的出すからすきに撃ってみろ。」

俺は、もう一丁の銃をイメージした。

なんか、2丁持つてるほうがしっくりとする気がする。

また、撃っては装填し、撃っては装填しを繰り返す。

なんか気分がいい気がする、そう思ってきた。

乾いた音が鳴り響く。

ん？今、何か記憶の断片が……。

燃え上がった世界が。

えっ？これって……。

「どうした？顔が真っ白だぞ。」

「いえ、何か今燃え上がった世界が見えた気が・・・。」

「そうなのか。何か思い出しつつあるみたいだな。今日はもうやめておこう。」

訓練中に倒れられてしまったら大変だからな。」

「わかりました。」

俺は射撃場を出た。

なぜだろう。あの花火のにおいがたまる空間がなつかしかった。そんななつかしく思うことはありえない。

俺にはちゃんと記憶はある。

俺はただの学生だったはずだ。

第六章 伝説

――「西坂くん、可愛いそう・・・。」

何もできないで、ただ眠り続けるなんて・・・。」

私は、西坂くんの病室まで来てしまった。

「私にはマサがいるのに・・・。」

でも、なぜか西坂くんの顔が見たかった。

なぜだろう・・・。

あまり話したこともない。顔も普通よりちよつとカッコイイくらい。

印象的だったのは、彼がたまに見せる笑顔ぐらいだ。

「私ったら、どうしちゃったのかしらね・・・。」

彼のそばにいるとなんだか安心した気分になれる。

なんなんだろう、この気持ち・・・。

「あつ、そろそろ時間だ・・・。」

そういえば、友達と遊ぶんだった。そろそろいかなきゃ。

今は、誰もいないから、別に名前でも大丈夫だよな。

「またくるね。トシくんっ!」

――

「トシくんっ、買い物行こうよ。」

それに、この街のことよく知ってもらいたいから、一緒に市街地のほうがいいかな?」

「ああ、いいよ。後、図書館にも行ってみたいな。

前に、おっきいのがあって言ってたよね?」

「うん、いいよ。じゃあ、いこっ！」

リンは満面の笑みだった。なんか、リンの笑顔ってかわいいな。

「ん？どうしたの？私の顔、なにかついてる？」

「なんでもないよ。」

「そっかあ。あのさ、トシくん。」

手、つないでもいい？」

「ん？別にいいけど。」

「やったあ。」

俺は、リンに手をつながれ、市街地の方へ出かけていくのだった。

「ここだよ、図書館。大きいでしょう。」

確かにリンの言うように大きかった。高さは五階くらいか。

図書館にしてはでかすぎだろ。

「ほら、トシくん。びっくりしてないで中に入る。」

中は、太陽の光が降り注いでいる場所もあれば、暗い場所もある。

本を読んでいる人もいれば、何か書いている人もいるし、うたたねしている人もいる。

みんなが快適に、そして自由なことができる憩いの空間なのかもしれない。

この図書館は。

「トシくん、何について知りたい？」

「そうだな……。とりあえず、俺のような討伐師がいたかどうかだな。」

紋章が腕にやきついてるとか。双銃使いとか……。」

「そうだね。まずは、そんな人がいたかどうかだね。」

うーん、てことは人物についてか。

じゃあ、調べに行こうか。双銃使いはそんなにいないから、すぐにわかるよ。」

俺はリンに連れて行かれ、図書館の奥に入っていくのだった……その途中、俺は一つの絵が目に残った。

それは、燃え上がる世界の中で一人たたずむ男の絵だった。

「どうしたの？」

「リン、あの絵ってなに？」

「ん。あー、あれは伝説になってる双剣双銃使いの絵だよ。

確か、17年前に姿をくらましちゃったらしいよ。討伐師の中で唯一剣も銃も契約できた男。

名前、なんだっけ。忘れちゃった。でも、それがどうしたの？」

「さっき訓練中にその絵のような燃え上がる世界が見えたんだよ。」

「えっ？でも、世界が燃え上がったのは17年前の外族が活発化して、戦争状態になった時だけだよ。

この戸別は、その伝説の男を先頭にした討伐師達によって守られたみたいだけど。」

「でも、17年前は俺が生まれた年……。」

「あれ？トシくんって17歳だったんだ。私と同じだね。」

「えっ？リンって17歳だったんだ……。でも、なんで17年前のことわかるの？」

「17年前のことは討伐師なら、みんな知ってるよ。教えられるもん……。」

「そうなんだ……。この男について、詳しいことが知りたいんだけど……。」

いいかな？」

「うん、いいよ。トシくんは17年前の戦争の記憶があるなら、もしかしたら17年前に消えたっていわれるこの人の生まれ変わりかもしれないもんね。

その人は伝説ともいわれるからたくさん本があるよ。

じゃあ、いこっ！こっちだよ。」

「ああ。」

俺は、伝説とまで言われたこの男の生まれ変わりなのか？でも、いくら生まれ変わりだといって記憶までも受け継いでいるはずがないだろう。

伝説の双剣双銃使いか・・・。

俺はまだ双銃しか使えない。もしかして、双剣も使えるのか・・・。

「トシくん、ここだよ。たくさんあるけど、どうする？」

リンの言った通りその男についての本はたくさんあった。

ざっと見ても100冊以上はある。さすが伝説。

「とりあえず手分けして探そう。この人の使ってた武器とか、いつ現れたのとか。」

「わかった。私はあっちを探してるね。」

リンは、本棚の反対側に行ってしまった。

さて、俺も探すとするか・・・。

たいていの本は戦争の時にこの人がどう戦ったとか、何を使っていたとか、英雄としてたたえられている本ばかりだった。

この人が使っていたのは双剣双銃としか書かれていない。そして、名前までふせられていた。

「トシくん、あったよ。」

「おっ、すごいな。俺なんか全然見つからなかったぞ。」

「この人、いろいろ不思議な存在だからね。私もはじめて名前したよ。」

「それで、この人の名前は・・・」

――討伐師 東坂 シュウ

彼は後に、伝説と呼ばれる英雄である。

戦争が始まる少し前に彼は森の中で発見された。

その時、彼は暗い世界の中で女に呼ばれ、ここにきたと言っていたという。

その後、彼は討伐師の資格を取り、腕に刻印したという。
なぜ、彼が腕にしたのかはわからない。

その時、彼の武器は双銃だったが、後に双剣も使ったという。

――

俺とものすごい似ている。

あの時あった女の人にまであっていたなんて……。

そして、最後にはこう書かれていた。

――彼は生きてしまう前に仲間にこういったという。

「私はこの戦いが終わるときえてしまうかもしれない。

だが、また何かが起こりきてほしいと願う人がいるなら、
きつとまたくるだろう。」

人の思いの力はとても強いからだから、きつと私にも届く。」

そういつて、彼は最後の戦いに臨みいなくなった。

そして、私たちの心に生き続ける英霊となったのだ。

――

――

彼が最後に行った言葉が気になる。またくるって……。

「ねえ、みて。この双銃って……。」

「これって、俺が持ってるのと同じだ……。」

「そうだよ。トシくん、やっぱりこの人の生まれ変わりじゃない
?」

「そうかもな……。少しだけこの人の記憶の断片みたいなもの
があるし……。」

「そうなんだ。」

俺はこの人の生まれ変わりなのだろうか。

普通に考えると生まれ変わってことになる。でも、記憶が受け継
がれることってあるのだろうか。

俺は、どうしたんだ・・・。

「トシくん、大丈夫？ 顔、真っ青だよ。」

「ああ、大丈夫だ。」

「そう・・・。もう、外いこっか？

ここにいたら、トシくんの具合がどんどん悪くなりそうだもん。」

「ありがとう。そろそろ、出ようかな。」

これから、買い物いくんだっけ？」

「うん、そうだよ。じゃあ、いこっ！」

俺はリンに手を引かれ、人の多い市街地の中へ行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249p/>

終末幻想

2011年4月23日18時54分発行